子どもの発案によるあそび (1)

三歳児—一学期

田中都慈子

まえがき

子どもたちが、自分たちで考えてはじめたあそびが次々に発展し、それが長期間続く時、一体何がそんなに子どもたちの気をひくのか、何が興味をおこさせるものなのか、と思う。

毎日、新しいアイディアが生まれ、あるものは、どんどん発展し、またあるものは、その場で消えてしまう。ちょっとした助言の言葉から、発展することも多い。一年間三歳児十六名（男十一名、女五名）のさかんな創作活動を見て、どんな過程を経て、あそびが発展したのか、どんなあそびがどの位続いたか、に興味をもった。そこで、学期ごとにくぎって主な活動を順にあげ、一年間の製作活動を含めての子どもたちが考え出したあそびをふりかえってみたいと思う。

「私たちは、子どもが恐れをもたず、自信をもって、人間として自由に自分自身を表現することにより、満足感を見出すことができるように助力してやらなければならない」（K・H・リード著「幼稚園」P・390）と、K・Hリードのいうように、子どもたちの創造的活動をのびのびと十分にのばすためには、継続的にできる時間を与えてやらなければならない。そしてある程度自由に使える材料を準備しておく必要がある。創造的活動によって、子どもたちは、自分たちのもつ欲求を満たすことができ、満足感を得る。意欲をもって物事にあたることは、さまざまな可能性をひき出す。毎日の生活の中で、たくさんの経験をすることにより、いろいろの面での発展がみられる。

現代のように、現実的な考えが多い中で、幼児の間だけでも、夢の多い、想像の世界を知ってほしいと思う。月に兎が住んでい

ないことのわかった今でも、やはり、なつかしい昔話を信じ、親しんでほしいものである。数字や字をかいたり読んだりすることよりもまず、楽しく遊ぶことのできる子どもになってほしいものだと思う。

一　学　期（四月〜七月）

こどものようす

四月当初は、泣いてあそべなかった子どもも四月中に落ちつき、絵本を読んでもらったり、積木、ブロックなどからあそびに入れるようになり、五月には、落ちついて思い思いにあそべるようになる。製作活動もさかんになり、熱中して材料ととりくむ子どももでてきた。六、七月は、戸外あそびもさかんで、水あそび、砂場あそび、園庭での虫とりなどが、多く行なわれた。以下、子どもから生まれた活動を、行なわれた順にあげる。

あそびの発展

(1)　椅子を使っての汽車あそび

椅子をいくつも続けて長くし、先頭は、椅子をひっくりかえして、椅子の脚にブロックをはめ、運転台にする。このあそびは、食堂車、救急車などに発展する。机をどけて、部屋を広く使えるようにしておくと、部屋中の椅子を使い、長い汽車ができ、ピアノをひくとリズムあそびにも発展した。一学期の間に全員の子どもが、この汽車あそびに参加した。

(2)　ブロックのピストル（図1）

ペアーブロックで、ピストルをつくる。形と色の組み合わせが、決まっているところがおもしろい。

制帽のゴムを上でとめ、カウボーイハットのようにかぶり、ピストルをもってあそぶようになる。

(3)　ブロックを使ってのボーリング

ペアーブロックをテラスに並べ、それをピンにして、ボールをころがし、ブロックを倒すあそび。

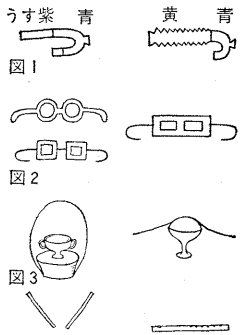
(4)　おまわりさんごっこ

ままごとあそびから発展したもので、男の子が、この役をひきうける。

(5)　望遠鏡づくり

好きな色のラシャ紙を丸めて、先に色セロファンをセロテープでとめたもの。絵をかいていた子どもが、つくりたいといい出し、教師が手伝ってつくったものであるが、すぐに一人でつくるようになる。何枚もちがった色のセロファンを重ねてはったものもできる。友だちの顔や外をみるのに使っている人もいたが、ほとんどが、つくる過程を楽しんでいた。長期間続き（三学期になってもつくっていた）全員が一回は、つくる。

(6)　積木を使っての楽器あそび



二人の子どもの発案による。床上積木を拍子木のようにたたくカスタネット、小型積木の立方体を手でたたくドラム。「こいのぼり」「行進曲」などの曲に合わせてたたく。

(7) 風車（かざぐるま）づくり

五歳児からもらったかざぐるまを見てつくるといい、はじめは、ほとんど教師がつくりクレヨンやマジックで模様をかいていたが、そのうち、真似してつくる子どもがでてきて、切ることもできるようになった。（三学期になってもつくる）つくることと、それでもってあそぶことの両方を楽しんでいたようである。

(8) 積木でつくった高速道路

小型積木を部屋いっぱいに組み立てて、素晴しい高速道路ができた。連絡汽車に床上積木を積んで、走らせたり、空箱でつくった自動車を走らせたりしていた。

(9) めがねづくり（図2）

色ラシャで、ふちをつくり、色セロファンを裏からはり、めがねをつくる。望遠鏡から発展したものだが、ふちをモールにしたりして、一学期中続く。

はじめは、ぺたぺたセロテープでとめていたので、形はよくなかったが、だんだん、スマートな形になってきた。

(10) 旗つくり

隣の組でつくっていたものをみて、つくる。わりばしに、折り紙を切ってつけていたが、模様をかいたり、日の丸をかいたりするようになったが、あまり続かなかった。

(11) 自動車づくり

高速道路をつくっている時、つくりはじめたものである。石けんのあき箱、小さな空箱に牛乳のふたを細いひごやマッチの軸で通して車にしたもの。

(12) 時計づくり

牛乳のふたにモールをつけたもの。文字盤にマジックで色をぬる。すきな色のモールをえらぶのも楽しみの一つのようだ。あそびながら、腕の時計をみて「今何時だ」といいながら楽しんでいた。

(13) 首かざりをつくる。

オブジェテープをつなげて首かざりをつくる。

(14) 自由にハンドカスタを打つ

学校ごっこを椅子を並べてしていた時、「ハンドカスタをちょうだい」というので、出すとチューリップの歌をうたいながら、そこにいた数人のグループが、合わせて打ちはじめる。そのうち

に「ピアノをひいてよ」というので、好きな曲を次々にひき、ハンドカスタで遊ぶ。そこへひとりの男の子が、マジックを指揮棒にして、椅子の上に立って指揮をはじめる。指揮者が、三人にもなったが、皆が笑いながら、ひと時を楽しんだ。

(15) 優勝カップをつくる（図3）

アイスクリーム、プリン、ババロワのから容器とリボンをセロテープでつけて、優勝カップをつくる。首からかけたり、飾ったりして遊ぶ。

(16) 食堂車と切符づくり

椅子を使っての汽車あそびから発展したあそびで、オルガンの椅子を机にして、ままごと道具を運んでごちそうをつくり食堂車にする。片方では切符をつくって遊ぶ。並行して行なわれる。

(17) かたつむりをつくる

虫とりがさかんに行なわれていた時、かたつむりをつかまえ、室内でかっているのを毎日見ていた。アイスクリームのから容器を貝殻にして、モールをつけてつくる。

(18) 楽器をつくる

アイスクリーム容器とわりばしのたいこ（図4）とわりばしにマジックで穴をかいた笛（図5）。少人数で合奏する。

(19) お面づくり

画用紙に鬼や人の顔や山などをかいて切りぬき、かぶって遊ぶ。リズムあそびに発展する。

助言・誘導

その他にもいろいろな遊びや製作をしたがあまり個人的なものは省略した。以上のあそびの中で長く続いたあそびは、(1)汽車あそび(2)ブロックのピストル、(5)望遠鏡づくり、(7)風車づくり、(9)めがねづくり、(12)時計づくりであった。(12)の時計づくりは、ちょうど時の記念日の前の日に、子どもが、「時計をつくって」といい出したことから、子どもたちにどんなものにするかをきき、つくったものから発展し、子どもたちが、自分たちの好きな時計をつくりはじめた。できないところを、手伝った程度で、特別に指示を与えたり、教師側から働きかけたものはない。子どもたちだけで、遊ぶことができるようになり、安定して遊べるようになったことは、一つの大きな成長だと思う。幸いにも、大小とりまぜた空箱、わりばし、ストロー、あき容器、牛乳のふた、八ミリのからリールなどの豊富な材料を、父兄の方の協力で、いつも自由に使える状態にあったことが一つのきっかけとなり、十分に創造活動ができたことは、一学期の大きな成果であった。椅子や、ガラクタのような材料が、子どもたちの創意によって、さまざまな遊具に変わることは、非常に興味深いことであった。

（暁星学園幼稚園）